

# 亡父・美山要蔵の生前についての覚え書き

美山光庸(次男)

小説その一

地声は鍛えた大声だった。

(終戦玉音放送の翌八月十六日早朝、憲兵たちが大本営の物を盗って逃亡を始め、見咎めた衛兵たちに「いづれ市ヶ谷は真つ先に米兵に占拠されるぞ」などの流言を飛ばしているとの部下からの報告を受け)

「憤然として立ち上がった美山は、直ちに大臣官房の部下一千人を大講堂に集合させ、壇上から両足を踏みしめて一世一代の演説をぶった。毎朝、剣道の素振りや鍛えた大音声で、千人の頭上に響き渡った。

『外地には三百万の将兵が帰国の日を待っている。しかるに、いち早く逃亡するのは何事か。去る者は去れ。自分は女房子供を給仕にしてもここに踏みとどまって、全軍の復員を待つ。(前日早朝自決の阿南)大臣の死に恥じる。考えを改め、一意奉公に励め。今から大臣が三鷹のご自宅に出發される。それをよく拝み、よく考えて、お送り申し上げる』

渾身の一喝に、場内は静まり返った。「(伊藤智永著『奇をてらわす』・文庫版『靖国と千鳥ヶ淵』より)

事実亡父は、「給仕になる」ことのない千代田区立麹町中学校三年次に、五十六歳でPTA会長を務めた。秋の運動

会での運動場では、千五百名の全校生徒を前に壇上から挨拶、その割ればかりの大声は、私が気恥ずかしさを感じるほどであった。

小説その二

戦後の家庭内

大声を挙げることはなかった。

子どもたちには、家庭内で大声を出した亡父の姿の記憶はない。終戦を真摯に受け止め、敗戦後の後始末を職責とすることにより、一意専心の身にあつては、子どもへの勉強などの日常に自ら特段の意向を示すこともなかった。その意味では自由に任せて子どもたちの意思を尊重することを旨としていたが、ただ、三人の子どもそれぞれが先々への道選択を控えて相談を持ちかけた場面などでは、親として可能なサポートは黙って惜しみなく打ち出した。

小説その三

書・花の道への打ち込み方は尋常ではなかった。

戦後に家族五人で居住した家(亡父四十四歳から六十四歳までの二十年間)は、終戦直前までは、最後に阿南陸軍大臣が自決した官邸に敷設されていた馬子舎を改造したものだった。一本の廊下に沿った八畳、

四畳半、六畳の居間のほかは、台所、風呂場という建坪二十五坪のこぢんまりした造りだった。が、なぜか玄關だけは表、内の二箇所があつた。

衆議院公舎に模様替えした千坪の旧大臣官邸と竹柵で仕切られただけの二段構えの庭地七十五坪には、毎朝卵を産み出した鶏小屋を設けたほか、各種野菜を植え、居宅から汲み取った人糞を父と交互に天秤棒で私も運んで収穫に励んだ。

六畳間には父と姉の二つの座卓のほか、五人揃つての食事時に使う長作りの卓袱台があり、食事終わって台を片付けた後に亡父の寝床を敷く日々であつた。そんな手狭な空間にあつても、父は連夜座卓で黙々と筆を執り、新聞紙が真っ黒になるまで二、三時間集中しての修練を怠ることはなかった。

また、花にあつては、自然に生息の植物を素のママに活かすことを旨としていた。そのためには遠路房総の山中に向いてまで、茂みから受ける両手両足の皮膚疾患をもとせせず、花材収集に一心に励んだ。

小説その四

「霊は遍在する」を信条としていた。

御霊への祈りは、祈りを捧げる人がどこにあつても通じるとの揺るぎない思いのもとに、後半生は戦没者慰霊に終生を捧げた。

家にあつては観世音菩薩像の見守る八畳間の仏壇前で、日蓮宗信者として毎夜十五分間の誦経を一日として欠かさず、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にあつては、在来宗派に止まらず、広く新宗連各派の理解も得て毎年の奉仕法要を仰いだ。

小説その五

最晩年も「千鳥ヶ淵へ行かねば」

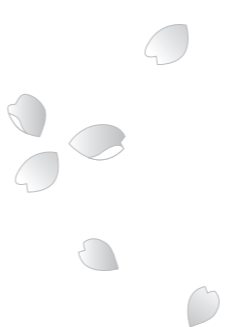
八十六歳で最期を迎えた二年前から病により入院、同時に奉仕会理事長の任は離れて、終日ベッドでの療養にあつた。

ある日には眠りから半ばの目覚めで突如として立ち上がり「千鳥ヶ淵に行かねば」と音広に手を通し始め、見舞いの私が「もう次の方に引き継いでいただいているのだから」とベッドに押し戻したこともあつた。

最晩年の入院先で加療専一を余儀なくされていながら、時になお千鳥ヶ淵戦没者墓苑へ奉仕に向く思いに駆られていた。長く全身全霊を賭しての奉仕の思いに、最後まで見合つた一齣と、家族全員が感慨を新たにした次第ではあつた。



## 平成二十九年四月九日 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕茶会の提唱者 美山要蔵ゆかりの品展示



# 父・美山要蔵の思い出

深澤靖子（次女）

## 気配りを欠かさぬ心の持ち主

父はなんというか、人との関係が水平（フラット）でした。自分は措いて、他者に尽くす人だったと感じています。

市ヶ谷の引揚援護局時代、朝に迎える車が来ます。定刻より早めに来ます。それと察すると、父は母に言いました。

「おい、渡辺君にお茶を」  
母が淹れたお茶を盆に載せ、運転手の渡辺さんへ差し出すのはお運びさんの私でした。

ある朝、私は千代田区立永田町小学校登校の道途中に停車中の父の車に気付ききました。差し掛かると運転席から身を乗り出して渡辺さん。

「お父さんには内緒ね」  
近くまで早めに来て、定刻きつかりに自宅門前に。小学五、六年生時の子供心にも、渡辺さんの誠実な配慮は身に沁みました。母にはこっそり伝えたものの、父には口が裂けても言いませんでした。

## 新聞紙ぐるぐる巻きの大きな包み

「あつ、アルバイトの青年が来てくれる日だ。若者はいつだつて腹を空かしておる。家にあるもの、なんでもいい、みんな包んでくれ」

マーガリン、ジャムなどをはさんだコッペパンを主に、新聞紙でぐるぐる巻きにした大きな包みができあがりしました。小脇にフランスパンを抱えたフランス人よろしく、父は車に乗り込んで、出勤していききました。

## 父を支え尽くした完全無私の母

陸軍軍人の家系で、父を支え尽くした母・静枝は、また母で、完全無私の人でした。無私の佇まいのなかにこそ己は存在している、ともいえましようか。

あくまで家内で、あくまで控え目。すべてを秘して、なおかつ芯はしっかり。いまの世の中を生きる私には、とうてい真似られません。

## 父の職場で江戸千家茶道を習う

父は復員局く引揚援護局次長時代に、局内に文化的なことを取り入れたいと、サークル活動に文化部を新設しました。高校生の私も週一回の放課後、当時市ヶ谷（いまの防衛省敷地内）にあった役所に通り、役所の職員と一緒に受講しました。

広い板の間の稽古場には、庭から上がりました。床はとても高く、巨大とも思われる自然の踏み石が置かれており、膝を思い切り高く揚げて上がった記憶があります。

職員の方々は昼休みか職務終了後に習っておられたようですが、私はほとんど一人で習っていました。和服姿で引つ詰め黒髪の先生は、いつも次の生徒が来るのを、背筋を伸ばして正座で待っていてくださいました。うかがうとすぐ稽古をつけていただき、終わるとまたすぐに都電・三宅坂駅近の自宅（永田町一丁目八番地）まで帰宅していました。

役所で父と顔を合わすことはありませんでした。

### 一・美山要蔵という人

- 一九〇一年 ●（明治三十四年）六月十四日、美山平蔵・まきの五男として生まれる
- 一九三三年 ●（昭和八年）四月 宮地静枝（父は土佐出身・中将、伯父に南次郎大将）と結婚
- 十一月 陸軍大学校卒業（第四十五期）
- 一九四五年 ●（昭和二十年）二月 陸軍省高級副官
- 八月 終戦 阿南惟幾陸相自決
- 十二月 第一復員省文書課長
- 一九五〇年 ●（昭和二十五年）七月 引揚援護庁復員局局付
- 一九五二年 ●（昭和二十七年）三月 沖繩の遺骨収集へ
- 一九五四年 ●（昭和二十九年）四月 厚生省引揚援護局次長
- 一九五六年 ●（昭和三十一年）二月 ビルマ・インドの遺骨収集へ
- 一九五九年 ●（昭和三十四年）三月 千鳥ヶ淵戦没者墓苑竣工式・全国戦没者追悼式
- 一九六二年 ●（昭和三十七年）五月 厚生省退官
- 一九七七年 ●（昭和五十二年）五月 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の理事長に就任
- 一九七八年 ●（昭和五十三年）十月 靖国神社A級戦犯合祀
- 一九八三年 ●（昭和五十八年）十一月 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕茶会開催
- 一九八七年 ●（昭和六十二年）七月三十一日、死去、八十六歳

### 二・華道、書道、茶道とのかかわり

- 一九四七年（昭和二十二年）四月・今村均大將軍事裁判の弁護でラバウルへ五月帰国
- 六月・復員局に文化部新設（第一復員省文書課長）
- 軍刀を売り、茶筌と花鋏と筆を購入
- 後半生は「生活に幅」「内面の豊かさ」「文化的活動の充実」「芸術的な道の探求」

### ■華道

- 草月流（勅使河原蒼風・花のピカソ）と日新流（新井日新・自由花）に入門
- つづいて古流（伝統花）
- 一九五〇年（昭和二十五年）十一月三日 華道・美山流創設
- 十二月二十五日、大正天皇祭に大宮御所で花を生ける。貞明皇后臨席
- 引揚援護庁復員局華道班 草月流・女性三十名・自由・上品・繊細・優美
- 美山流・十名・野性味ある無骨な力強い作風
- 一九六一年（昭和三十六年）一月二十八日 皇居で挿花 昭和香淳皇后臨席

### ■書道

- 一九四七年（昭和二十二年）書壇院の前本菁竹門下に入る
- 一九六三年（昭和三十八年）書壇院展で文部大臣奨励賞受賞、院友となる
- 一九六四年（昭和三十九年）総理府賞勲部臨時書家に無審査採用（二百万枚の勲記）
- 一九六八年（昭和四十三年）書壇院展で特別賞受賞、審査員となる
- 一九八一年（昭和五十六年）『王羲之との對話』を刊行

### ■茶道

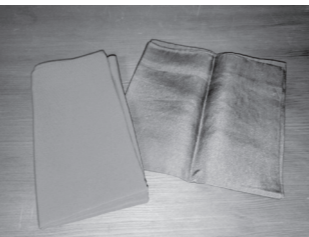
- 復員局文化部で江戸千家
- （伊藤智永著『奇をてらわず―陸軍省高級副官美山要蔵の昭和！』より引用）

### 美山要蔵ゆかりの品

一・茶碗  
生前、要蔵が愛用していたもの。没後、妻の静枝より次女の靖子が譲り受けた。



二・茶袱紗  
要蔵からの依頼で、妻の静枝がありあわせの布を使って手作りしたもの。要蔵が茶道を辞め、華道と書道に専心しようとしたとき、「多少なりとも茶道を習った靖子がいなさい、持っておくように」と生前に託された。



三・扇子  
仕事で頻繁に通った舞鶴出張の折に

京都や、神田、日本橋の専門店などで、買い求めたものと思われる。余白に、要蔵の記した覚え書きが見える。



四・美山照陽著『王羲之との對話』  
華道誌に連載の百話をまとめたもの。一九八一年（昭和五十六年）に刊行。照陽は要蔵の筆名。

五・千支年賀状  
毎年の千支を年ごとに五百余通、要蔵が家書で揮毫。

右より、  
一行目 寅、子、申  
二行目 酉、丑、巳  
三行目 戌、龍、午  
四行目 亥、卯、未  
六・伊藤智永著『奇をてらわず』  
講談社ノンフィクション賞の最終選考に残った力作。  
二〇〇九年（平成二十一年）刊

七・伊藤智永著『靖国と千鳥ヶ淵』  
「A級戦犯合祀の黒幕にされた男」の副題を持ち、カバーには「陸軍省高級副官・美山要蔵の昭和！」  
「奇をてらわず」の文庫版。  
二〇一六年（平成二十八年）講談社刊  
定価：本体一〇〇〇円（税別）